

四十雀

してとかく事をはかる間、彼山雀を其家の東一丁計ある親族のもとへうつしたるに、翁の死をや知けん籠を破りて飛去ぬ、さて葬儀など終りて後、妻子翁の墓にまうで、みれば、彼鳥そこにあり、此墓所は翁の家より西にて、うつしたる家よりは五丁計もあらんに、いかに去りて來りしにかと、人々あやしみて、例のごとく手を動して試れば、手につきて舞鳴ぬ、いと悲しうてつれかへらんとしたれど、やがて又空に飛さりぬとぞ。

〔璫囊抄一〕雀類字 鶇シバウカラ

〔饅頭屋本節用集之類〕四十雀シバウカラ

〔書言字考節用集五氣形〕鶇シバウカラ並又作鶇、四十雀同

〔本朝食鑑六林禽〕四十雀

訓四十加良、俗稱以雀四十隻代一鳥、故名、或謂以其類多集而名、俱名義未詳、狀似小雀ガウ而大頭黑兩頰、白、白圓紋、黑圈、至鷄胸、背灰青、翅尾黑、腹白、其聲清滑多嘯、其味微苦不佳。

〔和漢三才圖會四十三林禽〕四十雀 正字未詳

按、四十雀似小雀而大、○中其聲清滑多嘯、如曰四十加羅、故名之、其老者換毛色稍異形、亦大、俗呼曰五十雀、雌者腹雲紋幽微。

〔喚子鳥下〕粒餌小鳥の分 何にても水を入れる

四十雀 及び 右同斷○くるみ、豆のごま、花のみ、何れも水入、すりゑは生ゑ八分、紛壹匁、あをみ入、

大きな山がらにちいさし、かしらくろ白まだら、せはあさぎに黄色、ねすみいろまじりたり、はら白くくろきすぢ有諸事山がら同事にて、藝もつく鳥なり、さゑづりよし、子がひ尤よし、あら鳥秋のすゑより冬まで出る、へうたんにとまる、

〔食物和歌本草六〕四十雀シバウカラ